

<2019年度 FIC オープンセミナー>

人形師岡本芳一と「百鬼どんどろ」

—渡邊世紀監督の2つの映画作品を媒介に

国際文化学部「SJ国内研修」の研修地である長野県南部の伊那谷には、江戸時代に伝来した人形浄瑠璃を受け継ぐ黒田人形・今田人形・早稲田人形・古田人形の伊那谷4座が、いまでも活発に活動している。ほかに、大鹿歌舞伎・下條歌舞伎・中尾歌舞伎などの歌舞伎の伝統もある。

こうした伝統文化の存在が一つの背景になって1979年に始まった「人形劇カーニバル飯田」は、その後「いいだ人形劇フェスタ」と名称を変えながらすでに40年の歴史を有し、日本における最大の人形劇の祭典として、内外にその存在を知られるに至っている。

広島県呉市出身の岡本芳一は「百鬼どんどろ」、すなわち等身大の人形と踊るという、奇抜で前衛的な一人芝居の人形劇を創始し、とくに海外で評判になるが、彼が自らのアトリエを構えたのは地元でも東京でもなく、上伊那郡飯島町であった。このことも伊那谷の人形文化の伝統とその発展の文脈で捉えられるであろう。跡を継ぎ、自分なりの新たな展開を模索している「百鬼ゆめひな」の飯田美千香さん（2013年度の「SJ国内研修」でアトリエを訪問）も、鹿児島で「百鬼どんどろ」を観て衝撃を受け、はるばるやって来て伊那谷に定着している。

今回のFICオープンセミナーは、この人形師岡本芳一と「百鬼どんどろ」を取り上げたい。2010年、難病による62歳での他界で「百鬼どんどろ」を生で観ることはかなわなくなったが、幸い生前の岡本の姿を記録したドキュメンタリー『人形のいる風景—ドキュメント・オブ・百鬼どんどろ』（2008年）と、彼の演目を「劇映画」として映画化した『VEIN—静脈』（2011年）という、渡邊世紀監督による2本の優れた映画が残されている。

当日は、これらの映画を鑑賞することを通して、岡本芳一が「百鬼どんどろ」で何を表現したかったのか、その遺志をあらためて探してみたい。そのうえで、渡邊世紀監督がこの映画に込めた想いを、公演のプロデュースなどで岡本芳一と交流のあった飯田市出身の松澤文子さん（公益財団法人・現代人形劇センター執行理事）を聞き手にお伺いする。

人形劇表現の可能性、伝統と継承・変革の問題や、文化の担い手の問題など、「SJ国内研修」や国際文化学部絡む諸テーマを幅広く考える場になればと思う。



●日時:2019年7月6日(土) 14:30~17:30

●会場:法政大学市ヶ谷キャンパス ポアソナードタワー3階 0300教室
(JR・地下鉄各線の「飯田橋駅」または「市ヶ谷駅」から徒歩約10分)

●内容:

①渡邊世紀監督による岡本芳一関連の映画上映

・『人形のいる風景—ドキュメント・オブ・百鬼どんどろ』（2008年）

・『VEIN—静脈』（2011年）

②渡邊世紀監督と松澤文子さん(公益財団法人・現代人形劇センター執行理事)による対談

●連絡先:法政大学国際文化学部事務

03-3264-9345、jkokusai@hosei.ac.jp(参加費無料、事前申込み不要)